



神田賞を拝受して

清水 真一



去る3月10日付で日本天文学会から神田賞に就てご通知を頂きました。私としては天体写真についての業績など申す程の事もしていません、且観測から離れて既に30年只其当時の設備や感光材料にふさわしい事をやっただけ過ぎないので、本来ならばご辞退すべきですが、神田先生には始めからお勧めやご指導を頂き、又選考委員長の広瀬先生にも終始ご厄介になり全てをご承知の事でもありますので、ご辞退も如何かと存じ、お受けする事に致した次第です。

其後4月23日付で其思出や感想を書けとの仰せですが、神田先生の思出でに就ては既に日本天文研究会の観測月報135('75, Feb.)に一通りを記しましたので、ここには重複を避けて表題だけを挙げ詳細は同誌に譲り省略させて頂く事に致しました。

◎昭和8年12月20日金星掩蔽写真に就いて

◎昭和11,12年ダニエル彗星出現前後に就いて

之は恒星社天文学講座(昭和32年刊)第7巻に詳記。

以来東京天文台回報及び直接電報により主として彗星を撮影し其原板を天文台に送っていました。当時広瀬先生が主となり測定を発表して下さいました。之れはコペンハーゲン天文台からの電報が休止されるまで即ち終戦少し前まで続けられました。

◎年次不詳ですが其間神田先生のお勧めでボン縮星図の複写を製作しました。

◎昭和25年浜松笹ヶ瀬隕石の件

先生の命名でしたが其後30年2月には落下地点増福寺の希望もあって神田、村山両先生又山本先生の講演会を和田小学校に、夜は隕石供養会を同寺に開催しました。

◎昭和42年天文月報8月号に先生発表の土橋八千太郎の件につき数回文書往復。

◎昭和46年法隆雑記帳記事(天研、観測月報87号)「六月肺出」の件に関し同年4月1日先生と車中にご面談。

◎昭和47年9月湯河原に先生をお尋ねしたがそれがお別れとなりました。

◎昭和49年8月先生ご葬儀の際は私は微恙の為め参列できず、俣が代参しました。

観測月報に寄せた先生の思い出は大略以上の様なものであります。

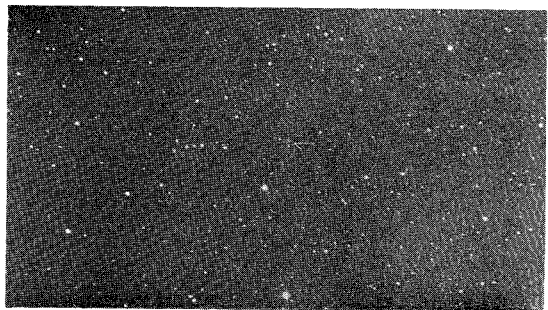
初私としては今回の先生の恩賞を折角頂きましても之にお答えする何物もないのを甚だ残念に存じます。

想うに今回受賞各位の大部分は恐らく壮年期の方々であり、今後共天文活動に精進される事と察せられますが、

私は前述の通り観測を離れて30年、現在は天文的には殆ど無為に残年を送っている始末で、此恩賞に酬いる意欲も可能性も持合せませんので此点慚愧に堪えず申訳けない次第と存じております。(S. 51, 5, 2 稿)

ダニエル彗星検出の思い出

1936年9月中の東京天文台回報11,12,14号に9月から12月までの推算位置が発表された。それはCripp氏やDubiago氏の軌道要素を基礎として、これに1936年までの木星摂動の影響も加えて広瀬秀雄先生が計算発表されたものであったが、光度も低いので私は自分の観測のなわばり外と思って看過しておいた。10月末天文学会の秋季大会のおり神田茂先生にお会いしたところ、先生から試写をするよう特におすすめがあった。(中略)1937年1月上旬は曇天つづき、中、下旬にかけては月明のため撮影不能だったが、その間、神田先生からは再度のおすすめがあり、1,2月にかけての推算表が送られた。1月31日夜、月の出前18時45分からおひつじ座の $\alpha=2$ 時19.5分、 $\delta=+17$ 度21.5分辺の7等星をガイドスターとして1時間の曝写を試みた。しかし中頃から空が少し濁り始めた。原板は仕上の上検板すると、きわめて淡くはあるがそれらしい像が認められたので、その旨を記し、かつ明夜再写の上原板を送ることを添記して東京天文台に報じた。(中略)主鏡は口径10センチ、撮影は口径8センチのエルマジー焦点距離33センチ同型の2個をツインカメラとして使用した。(中略)乾板はイソクローム、イーストマンなどを使用した。昭和11年ころから富士写真研究所長の藤沢信氏にお願いして、レギュラーエマルジョンのものを少しずつ作ってもらった。(中略)比較的小口径でこの検出のできたことは一に神田先生のねんごろなおすすめと、二に広瀬先生の正確な計算と、三に藤沢氏の好意による特殊乾板の提供とによるものである。(新天文学講座: 恒星社刊より抜粋)



ダニエル彗星